

周縁アプローチからみた東アジア文化交渉学の視座

—方法論と実践をつなぐ「場」の要諦—

野間 晴雄 (ICIS, 関西大学)

1. 文化システムの磁場

アジアのなかでは中国のもつ歴史的・文化的影響は際立っている。現在では、経済・政治面での世界への発信力や影響力も目を見張るものがある。その一方で、過度な中国への没入は、文化の多様性を軽視し、中国を核とするシステム以外には目配りができなく恐れがある。わたしは中国研究を専門としない立場から、アジアの多様な文化システムのなかに東アジア世界を位置づけるため、まず、「文化システムの磁場」(magnetic field of culture system) という概念を提唱したい。

この用語は、話者が関西大学東西学術研究所の共同研究「システムとしての文化の比較研究 一大航海時代を中心としたヨーロッパとアジアの邂逅」の最終報告(2009)としてとりまとめた編著のタイトルでもある¹⁾。磁力の作用する場のことである。異極間では互いにひきあい、同極間では退けあう。ふだんはその磁場を目にすることはできない(不可視)。しかし、磁石を置いた紙の上に砂鉄をまくと、砂鉄は磁力線の文様を描くことによって可視化する。これが複数の磁石をおくと、磁石のも強さや配置によって、複雑な磁場となる。

このアナロジーの響みにならえば、個々の社会はお互い相互に干渉しあって、結びついたり反発したりする。具体的には人とモノの動きによって起こる。モノのなかには、希少な貝類、金銀銅、貨幣のように共通の交換価値をもつものがある。広義には情報や言語までも含まれる。そのグローバルな出発点となったのは、ヨーロッパ諸国が未知なる外世界をめざした16世紀のいわゆる「大航海時代」である。ただし現在では、アジア域内にそれに先立つ広域的な相互交流があったからこそ、スムーズに西洋と東洋が繋がったことは常識となりつつある。これが13世紀以降のアジアの交易の時代・海の時代である。

「アジアの海」には、大きく、インド洋・アラビア海と、南シナ海・東シナ海というインド亜大陸をはさんだ2つのシステムが併存する。前者では、ヨーロッパ、中央アジア、アラビア商人、イスラーム、アフリカとの結びつきで大きな文明圏というべき1つの文化システムが形成されてきた。後者は中国の強い影響があるにしても、マレー系のひとびとの海洋活動や周縁の東アジア諸国自体の動きも考慮しなければならない。

1) 野間晴雄編著『文化システムの磁場—16～20世紀アジアの交流史—』, 関西大学出版部, 2010。

16世紀にポルトガルというイベリア半島の小国が、アジアへの橋頭堡として、オマーンやディール、ゴア、マラッカ、マカオという港市をつぎつぎと押さえ、目に見えない「海上帝国」を築こうとした²⁾。そのときにも、インド、アラビア、中国、マレーなどの既存文化システムや、彼らが営々と築いてきたネットワークをフルに活用／借用するシステムができあがっていたからこそ、有効に機能したといえる。

種子島に鉄砲（火縄銃）を伝えたとするポルトガル人は、1525年インド西海岸のゴアの兵器廠で近代的な火器を製造し、これをアジア各地に売り歩いていた。最後に到達したのが日本である。倭寇の首領ともいえる「五峰」と名乗る明の儒生（王直）の船で漂着したことに象徴されるように、既存の地域システムを十二分に活用しながら、ポルトガル人は賢しく進出を試みたのである。彼らはまず接触しやすい場所をこれまでの経験に照らして選び抜き、かつ接近しやすい人物に執拗にアプローチする。

ヨーロッパ列強による非ヨーロッパ世界への侵食は、これ以降、植民地化や紛争を伴いながらアジア世界を再編成していく。その一方で、アジアには、出自・背景を異にするいくたの文化を強力な勢力＝国家があつて、お互い複雑な均衡をとりあつてきた。アラビア商人、インドのグジャラート商人やマルワリ、チュティヤといわれる商人カースト、華人、マレー人などの商売に長けたグループは、この磁場のあいだをかなり広域かつ自由に動き回って、いっそう複雑な磁場を形成していった。このような広義の人、モノの動きによって形成された具体的な地域空間のひとつ、サブグループとして「東アジア世界」を考えたい。それはある一定の磁場が作用する空間と定義できる。

2. 中心性とネットワーク

上のような文化システムの磁場の準拠枠として、私は中心性とネットワークを指定する。われわれが「東アジア文化交渉学」という新たな学問の研究フィールドとして「東アジア世界」を考える場合は避けて通れない概念が、中心性／求心性（centrality, centripetal）である。ウォーラースタインの世界システム論は中心と周辺を世界レベル議論した史論であり、その反発から多元的な文化論や核がその修正論・反論としていろいろ提起されている。しかし、その修正・反駁論を東アジアのフィールドで無節操にうけいれることは厳に慎まねばならない。

「大伝統」としての儒教的思想や行動規範、実践思想としての道教が前面にでてくることは、周縁であっても否定できない。むしろその「大伝統」が、距離、自然的障壁、生態環境、交通ネットワークなどによって、あるときは連続的に、ある場合は不連続に、浸透している状況や過程（プロセス）の見極めが肝要である。

ベトナムは、琉球・台湾と並んで、われわれのGCOEプロジェクトでは重要なフィール

2) 野間晴雄「ゴア、マラッカ、マカオのトポス—アジアにおけるポルトガル文化遺産—」、関西大学文学論集、第57巻2号、2007、125-151頁。

ドである。社会の統合、王権や成熟した統治組織の存在など、照葉樹林文化論で事例として取り上げられたような地域の社会構造よりは、はるかに複雑かつ階層的・階級の性格もっている。しかもベトナムには漢字文化が根付き、中国の政治・行政システム、儒教的倫理観や道教的心性も色濃く刻印されている。ただしそのモデルとなったのは、キン族が住む北部ベトナム、つまりホン川（紅河）デルタの水田稲作地である。周縁の少数民族、焼畑・棚田が卓越する山地・丘陵とは、わずかの距離・標高の違いであるが、峻別された空間となった³⁾。そのキン族の周縁、すなわち中部との境付近を根拠にしていた周縁的なキン族が南下、開拓していき、中部ベトナム（安南）、南部ベトナム（コーチシナ）を自らの領域としていった。その過程で社会制度には多くの変質、改変が加えられた。

ベトナムは、歴代中国王朝に対しては冊封システムを維持しながらも、周辺諸国に対しては“小中華”としてふるまってきた。琉球王国も中国との関係や文化を維持しながらも、奄美諸島への北山文化の浸透、宮古・八重山の植民地的経営など内部での周縁化の創出も視野に入れなければならない。

沿海東アジアには多くの島嶼が分布する。しかし、東シナ海上には黒潮というひじょうに流れの速い海流があって、北上して日本の太平洋に達する。その海域では季節風や台風も航海や農業に大きな影響を及ぼす。複雑な沈降した海岸線や沿岸に点在する島嶼群がある奥深い湾口は、小さな船の避難所・風待ち港として利用されても、前近代には中枢港湾にはなりえなかった。しかも沿岸の航海にはかなりの難度を要求する。航海・漁業の守護神として、台湾・福建省・広東省を中心に、東南アジア沿岸部から日本列島にまで分布する道教の女神である媽祖信仰や天后宮は、華人の移住とネットワークの拡大という直接的な契機として、周縁性の傍証ともなる⁴⁾。

離島に附属した島嶼、たとえば台湾島の周囲にある澎湖諸島、緑島、蘭嶼、フィリピンのバタン島などは現在でこそ周縁の周縁かもしれないが、海のネットワークでは、まさに本丸に入るまでの門戸として、真っ先に新しい文化や文物が入ったり、交易したりした場ともなった。しかし戦時にはすぐさま草刈り場的な戦場となり、略奪や混乱・混淆がいち早く生じる場でもあった。

われわれがGCOEの博士後期課程大学院生の周縁としてのフィールドスタディの場として昨年から取り組んでいる地域に天草（熊本県）がある。ここは西南日本の東シナ海に面した天草上島・天草下島を中心に120余りの島からなる島嶼地域で、全島がほとんど低山性の山地からなり、平地はごくわずかしかない。八代海側は多島海と出入りの多いリヤス式海岸、天草灘側は断崖と荒々しい岩礁が連続するが、いずれも20世紀初頭までは陸上交通はほとんど機能せず、伝統的な集落はもっぱら海岸にへばりつくように形成された漁村と内陸部の谷筋に形成された水田稲作集落に大別される。天草は外世界、とりわけ西方（大陸中国、あるいは東シナ海域）のからの文物、思想、宗教などがまっさきに入りやすく、

3) 野間晴雄「P.グルーのみたベトナム農村空間と米の力—『トンキンデルタの農民』再検—」, 関西大学文学論集, 第52巻3号, 2003, 145-172頁。

4) 高橋誠一「日本における天妃信仰の展開とその歴史地理学的側面」, 東アジア文化交渉研究(関西大学文化交渉学教育研究拠点), 第2号, 2009, 121-144頁。

かつそれが保持されやすい隔絶性も備えていた。キリスト教殉教の史跡が多く、隠れキリシタンといわれる土着宗教と混淆した宗教が明治初期まで潜伏して信者に継承されてきた。天草は幕府の直轄領（天領）であり、現在は同じ熊本県に所属しながら、肥後熊本藩とは心理的距離も物理的距離も遠い。鎖国下でも異教が見過ごされる装置を有していたといえよう。

東アジア文化交渉学のフィールドとしての周縁には、このような強大な権力のベクトルや物質文化のみならず、思想・学術など高等文化の果たす役割や、中心となるべき社会をとの関係性の議論が重要である。父系的社会、祖先崇拜、族譜の重視などの東アジア的特質が、多系的、双系的なネットワークという東南アジア的特質といかに交わり会うかが、南部では分析の要となろう。

それとともに、周縁内部での階層性、不連続性の議論も不可欠である。換言すれば、われわれの目標は、「世界単位」⁵⁾の部分集合としての中華世界の周縁を、さらなる腑分けによって精緻化・可視化することである。普遍モデルをめざすのではなく、地域モデルに集中することとで精緻化するとともに、他の地域との比較・参照という相対化によって、新たな知見を得ようとする営みでもある。

以下、2つの事例をあげながらこのことを論じる。

3. 周縁地域としての確立

(1) 周縁としてのグエン朝フエ⁶⁾ —都市域の事例—

グエン（阮）朝（1802～1945）は中部のフエを都とし13代続いたベトナム最後の統一王朝である。現在のベトナムの国土を範囲とする。しかしその実は、中央集権力が2代ミンマン（明命）帝の時代以外は弱く、清国の冊封を受け「越南」と名乗るなど、小中華意識だけが強い脆弱な国家であった。1884年の第二次フエ条約で中部のアンナンはフランスの保護領となり、9代のドンカイン（同慶）帝以降にいたっては完全なフランスの傀儡となるが、王室はなお一定の声望を維持した。

フエ都城は北京の紫禁城のミニチュア版といわれながらも、大砲が戦時の主役である19世紀の初めに建都された都城であるため、フランスのポーバン式築城術が随所に用いられ、都市プランや景観でも外来要素が在来文化に巧みに融合している。フエ地方は1558年にグエンホア・ホア（阮瓊）が順化処鎮守になって以降、歴代のグエン氏は自己領域をダンジョン、ナムハー（南河）と称し、フエ周辺を王府にする。キムロン（1636～1687）、フースアン（1738～1775）などの王府が、フホン川左岸に方形の京城が一部重複して建設された。右岸のグービン山がビンフンの役割を果たし、2つの中州の島が青龍と白虎に相当するとなど風水が重視されたが、京城は正南北ではなく、東南—西北に偏している。グエン朝フエの都城もその延長上にある。

5) 高谷好一『「世界単位」から世界を見る —地域研究の視座—』京都大学学術出版会、1996。

6) 野間晴雄「周縁アプローチからみたグエン朝フエ：都市プラン・外港・交易の理念と実体」、第52回 歴史地理学会大会（神戸大学）での発表、2009年9月19日。

フエは大きく、1) 城壁内の京城、2) 東部の商業地区、3) 西部の郷紳居住区、4) 南東、北東部の職人・工人地区、5) 対岸の廟集中地区、6) 対岸のフランス人居住の新市街、7) 外港の7つに区分できる。1) の内部には、皇帝と親族の居住する皇城、武官がいる内城＝紫禁城を内部に持つ三重の入れ子構造をしていた。京城には下級兵士、文官、商人が居住していた。1884年以後はフランス軍が京城内に駐屯し、一般庶民も京城内に居住を許されるなど、身分による地域制は大きく崩れていった。上記7地区のうち、右岸に新市街と廟が位置する。新市街は放射状道路と直交道路が卓越するヨーロッパ風の都市プランで、教会、植民地関係施設、学校、商業地区などからなる。右岸の丘陵には別荘の要素を持った皇帝廟が生前から建設され、兩岸の川沿いの景勝地には、退役文官や武官が郊外の居住志向から緑の多い住区を形成した。残余の地区は左岸に位置する。

華人は京域外に隣接した河港機能をもつザーホイ地区に集住し、福建、広東、海南などの会館も建設された。ここではホイアンやサイゴンとの商業ネットワークが重視されたが、現在では、政治体制の激変により、会館の維持は海外華人やフエ以外の同郷華人が担う。この地区の前身となるのが、フオン川を下流約4kmの左岸に列状に形成されたミンフォン（明郷）といわれる区画で、1636年にタインハー（清河）を割譲して設定された⁷⁾。広南グエン氏が華人商人に王府近くで国際貿易を承認したことに起源する。しかし19世紀前半の都城の濠建設で中州が形成されて港は衰退し、京城に隣接した近いバオビンに移行し、国内地域交易地に変容する。ここは元来、都城へ磚＝瓦を提供する土取場をもつ半農半工の集落であった。彼らは内部に退き、川に沿った列状の片側地区は移住者による商区・河港として栄える。しかし華人は商売上の利便を求めて徐々にザーホイ地区やフエ以外に移動していった。

史料、遺跡、地図と旧河港地区での実態調査から、フエ都城の地域制と、域外との関係性をとらえようとした本研究は、周縁的かつ近代の変容を余儀なくされた最後のベトナム都城空間フエを多面的に考察するのが、都市域を中心とした「周縁アプローチ」である。

（2）周縁としての中国東北地方（満州）—農村域の事例—

中国の生態空間は、古くから南船北馬といわれるように、秦嶺（チンリン）・淮河（ホワイ）線という著名な東西の線で、大きく南北に分かたれる。北が畑作・牧畜・陸上輸送の空間で、南が稲作・水運・商業の空間である。乾燥した黄河流域の中原において、漢民族によって始原し発達した中国文明は、長江流域に南下し、黄河流域とは異なる湿潤多雨な生態環境のもので稲作文明を成熟させていった。稲作文明のルーツが長江流域の中下流域にあったとしても、そこに元来は畑作にたけた商業的な漢民族との出会いによって融合し、高度でかつ集約的・商業的かつ園芸的稲作が大きく開花した。

ところが中国文明は、万里の長城に代表される夷敵の侵入を防ぐ長大な障壁をつくり、北への進出には禁欲的であった。満族（満州族）がむしろ万里の長城以南に進出して、明

7) 野間晴雄、西村昌也、篠原啓方、佐藤実、岡本弘道、木村自、氷野善寛、熊野建、Nguyen Văn Đăng、Nguyen Minh Hà「ヴェトナムのフエ旧外港集落の天后宮と閔聖殿の調査基礎報告」、東アジア文化交渉学研究（関西大学文化交渉学教育研究拠点）、第2号、2009、261-288頁。

の旧領を征服し、八旗を北京に集団移住させて、華北以南の中国を支配する体制を築き上げた。1644年に明が滅びると満族からなる清の歴代の皇帝は、漢民族が圧倒的多数を占める領域で、習俗の漢人化（中国化）、同化を進めていった。その例が、剃髪易服（髪を剃り、服を替える）などの可視的な満族の習俗を強制したなどの文化強制を行ったにもかかわらず、支配民族として自らの言語である満洲語は衰退していったことに象徴的に示される。

一方、満洲民族の故地である満洲、すなわち現在の東北地方（遼寧省、吉林省、黒竜江省）への漢民族の移住は制限されていた。ところが19世紀末以降の政治的混乱や華北の人口増加による困窮によって、漢民族の農民が東北地方に大量に入植する動きが加速され、またたくまに東北地方に漢民族人口が急増した。その大きな流れの一つが、山東半島から渤海を渡って遼東半島に移住し、さらにゆるやかではあるが山地が連続する半島を通過・北上して、平坦で肥沃な東北平原に達するものである⁸⁾。あとひとつのルートは、山海関を經由しての陸路である。いずれもめざす農業開拓地は東北平原である。ここはもともと満族をはじめとするツングース系諸民族が放牧などを行っていた人口希少空間であるが、そこに漢民族が充填していった。

その一方で、満族は人口の上でも生活範囲の上でもまったく東西の僻遠の山間地や乾燥地に追いやられ、満洲語をはじめとする独自の民族文化の維持・発展に努めたにもかかわらず、満族の間でも中国語が話されるようになり、習俗も中国化していった。結果として、屋根を貸して母屋をとられたかたちとなった。

ただし、こと農業技術に関するかぎり、華北の漢民族は稲作に疎く、トウモロコシや大豆、コウリヤン、アワなどの雑穀栽培を拡げていった。遼東川は遼寧省を南下して渤海に注ぐ河川である。その下流域（遼東デルタ）は降水量600mmという稲作には限界的な地域であるが、夏に降雨が集中し、かつ温度も上がるため、水田稲作は可能であった。ただし

⁸⁾ 物質文化の文化交渉の卑近な例として餃子があげられる。山東省に発祥した餃子は、小麦粉を練った皮に豚肉、白菜、ニラなどの野菜類を刻んで独特のかたちに包んで茹でる水餃子が本義で、正月などの儀礼食としてハレの食事であった（于亜「中国山東省における餃子食の意味と地域的特質」、人文地理、第57巻第4号、2005）。これが漢民族の東北地方進出とともに普及し、点心化するやち昼の軽食へと性格が変、多くの専門店が立地している。渤海をわたった港湾都市大連などでは、さまざまな魚介類を具にする高級グルメ化も顕著である。ところが、東北地方の開拓移住者や日露戦争以降の中国東北地方と日本との接触の増加などによって、餃子が日本人、とりわけ食経験のある引き揚げ者らによって（一部は山東省の来日華人による）第二次世界大戦後に伝えられ、多くの創業をみる。本場中国では残りのもの水餃子をおいしく食べる方法としての焼き餃子（鉄板の上で焼き、出す直前に水をかけて少し蒸した状態にする）がメニューの中心となるのが特色であり、水餃子は一般的でない。また、米食・魚介類が中心であった伝統的日本食からはまったく周辺の、間食や補助的な副食としての位置づけの食品でもある。自ら家で調理する料理ではなく、屋台や中華料理店などでごく普通に供され、アルコール類やご飯もの（焼きめし）、ラーメンなどとのリーズナブル価格でのセットメニューも一般的である。あるいは、店からテイクアウトして自宅で副食の一品として食することも多い。最近はこのような参入が容易でローカル色がきわめて強い「B級グルメ」によるまちおこしが各地でみられ、それをマスコミが追い回す状況が現代日本では続いている。ここで餃子は食材として注目を集め、宇都宮市、浜松市、静岡市、福島市などの集積地区を産み出している。これらの地方都市では、多くが戦後に屋台から発祥し、その創業者は、旧満州引き揚げ者とする言説が多い。いずれも餃子は、少資本で開店可能な参入の容易な外食業種としての性格が共通する。

満族によって長らく湿地として放置されてきた。現在では、中国における最も良質な米を産する（中国で高級すし米用となるもので、日本の品種の改良である）、1戸あたりの家族農業による経営面積が10haを超える、農業機械を最大限に活かした大規模灌漑稲作が、漢民族によって行われている。その中心が盤錦である⁹⁾。

そこから900kmほど北上した黒竜江(アムール川)の支流である松花江の中・上流域は、北緯46度を超える(北海道の稚内とほぼ同緯度)位置にありながら、氾濫原域や谷底平野では貯水ダムを建設して灌漑用水を確保するため、夏期の稲作が可能である。これらの稲作適地に入植して稲作を広めたのは、朝鮮半島を経由して来住した、長白山地周辺に住む朝鮮族である。日清・日露戦争の勝利によって、日本は遼東半島の先端の関東州の旅順・大連を押さえ、20世紀以降には南満州鉄道株式会社という半ば国策の開発機関によって鉄道沿線の都市・農地開発が進められた。

一方、西からシベリア開発を進めていき極東を狙っていたロシアは、1860年に北京条約によって沿海州一帯を清から獲得し、72年からは念願の不凍港ウラジオストックをラビョフアムルスキー半島南端に建設して、内陸進出と千島、サハリン、カムチャッカ半島の領有、日本海交易で日本との足がかりをつかみ、ひいては太平洋進出を試みようとした。1896年の露清同盟密約によって、ロシアはウラジオストックからの東支鉄道敷設権を得て、途中にまったくロシア様式の都市、哈爾濱(ハルビン)を建設した。このルートこそが最初のシベリア鉄道の本線ルートである。

この東北地方北部の要部をロシアに代わって20世紀前半に開発・改造していったのが、南満州鉄道株式会社を介した日本である。1932年には日本の手により、この北支を含めて清の最後の皇帝となった愛新覺羅溥儀を執政(のちに皇帝)として満洲国が誕生する。この傀儡の半疑似植民国家の理念は、日満蒙中朝の五民族による「五族協和」である。

ここで、朝鮮族によって先鞭をつけられた稲作が、冷涼な東北日本の耐寒種を導入し、日本の精緻な栽培技術を導入することで拡大していった。その担い手となったのが、石川、富山、新潟、山形、秋田や長野県など北信越地方からの農業開拓移住者で、その一部は、戦後も日本へ帰還せずに、現地に定着して苦難を生き抜いた中国残留孤児であった。日本海を隔てた日本と東北地方が寒冷地稲作や大規模畑作の移植というかたちで結びついて、あらたな周縁地域が生まれたといえる。

4. おわりに —地域スケールと地域研究—

時間軸と空間軸が交叉した周縁は支配する主要民族にとってはフロンティアであったが、地政学的な位置づけが変質するなか、そこが新たな周縁地域として独自の性格が付与され

⁹⁾ 「環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」、日本学術振興会科学研究費(基盤研究(A)一般、課題番号22242028)によって、2010年9月3日より9日まで、中国東北地方の大連、ハルビン、遼寧省遼東デルタの大窪県盤錦、黒竜江省方正県(松花江中流域)などで稲作地を視察・踏査できた。調査のお膳立てをしてくれた東アジア文化交渉学専攻博士課程前期課程で、大連出身の薫振江君に感謝する。

る。東アジア世界の場合、中華世界という圧倒的な求心力をもつ勢力が連綿と存在した。その周縁地域が、交通条件の変革、相異なる政治体制間での応酬、経済力格差などによって、近代・現代には独自の様相を呈する。東アジア文化交渉学の視座として、このような面・空間としての実態をもった地域の摘出と、そこでの、モノ、経済、人の交流や変質、同化・融合、置換、侵食などの総体が研究の重要である。

地域研究としてこの周縁を1つの実体とするならば、その内部での点としての狭い地域（たとえば上述のフエの郊外における河港商区など）をとりあげる理由としては、単なる事例としてではなく、ひとつの実体の機能的究明の典型とすべきである。地域スケールをさらにフオン河下流域と沿岸砂丘を含んだ、相対的に広大な地域をとる場合に見えてくる文化交渉の磁場とは、当然のことながら分析手法も得られる知見も異なる。さらに南シナ海を介したヨーロッパ、中国、日本、他の東南アジア世界との接触は、異領域との結合（ホイアンというチャンパという先住民起源の港市）や取り込み、変質にもつながる。ひとつの周縁地域をとりあげる際に、ミクロ、メソ、マクロという3つの段階の考察を適宜使い分けながら、周縁地域像を描くことが要諦となる。

GCOEの院生の教育プログラムとしての「周縁プロジェクト」のフィールドワークで留意したことは、このスケールを意識したシステムの設定と、実際に狭い地域や些細といえる事象やモノをいかに分析して、マクロスケールに結びつけるかのプロセスのトレースである。Think globally, Act locally という常套句の Act をフィールドワークによるデータ収集とみなせば、周縁地域の明示的な認識と地域スケールごとに何がキー・イシュー (key issue), すなわち何が解決すべき課題かを見出すボトムアップ的な所作が見直されるべきである。演繹的仮説の検証との意識的な併用が期待される。その往復運動の彼方に、東アジア文化交渉学の豊かな地平が広がる。